

に じ

虹のキーホルダー



か ひと しっぴつしゃ たはたさん どー むみつえ
書いた人／執筆 者：田畑サンドーム光恵
ひと しっぴつきょうりよくしゃ にしおさちこ
てつだってくれた人／執筆 協力 者：西尾佐知子

にじ 虹のキーホルダー

ぼく いま さい せんしゅう もくようび じ どうしゃ う くるま うんてん
僕は今17歳。先週の木曜日、自動車のテストに受かった。これからは車を運転

してどこでも行けるぞ。「やった！」

うんてん うれ くるま かぎ
運転ができることより、もっと嬉しいことがある。これで車の鍵にキーホルダー
をつけることができる。

じつ ぼく じまん ぎんいろ しかく いし
実は僕には自慢のキーホルダーがある。銀色で四角くて、トルコ石がついている。

ま なか なないろ にじ
真ん中には7色の虹がかかっている。

このキーホルダーは父さんからのプレゼントなんだ。父さんはこのキーホルダー
をととても大切にしていた。おじいちゃんからもらったと言っていた。

ちい とき どう
ぼくは小さい時から、「ねえ、父さん、そのキーホルダー、くれる？」といつも
たの とう
頼んでいた。父さんはいつも

「そうだなあ、お前が車の運転ができるようになったらあげるよ。車の鍵につ
けるといいよ」

「えー、そんなのまだまだ先だよ。17歳になるまでなんて、待てないよ。。。」
いつも僕はお父さんにそう文句を言っていた。

でもそのキーホルダーは僕が11歳の時、僕のものになった。

とう びょうき し し まえ ひ どう ぼく はや
父さんが病気で死んじゃったからだ。死ぬ前の日、父さんは僕に「ちょっと早い
けど、これ大事にしろよ」と言って僕にキーホルダーをくれた。夏休みのとても暑

ひ
い日だった。でもキーホルダーなんかもらっても全然うれしくなかった。父さんが
ぜんぜん
とう
いなくなっちゃったんだから。

なつやす あいだ ぼく だれ あそ ひとり へ や と がっこう はじ
夏休みの間、僕はずっと誰とも遊ばず一人で部屋に閉じこもっていた。学校が始
まって、クリスマスが来て、少しずつ普通の生活ができるようになった。少しずつ
すこ すこ
「母さんも悲しいんだから、僕がしっかりしなくちゃ」と思えるようになった。
かあ かな ぼく おも

キーホルダーはずっと机のひきだしの奥のほうにしまっていた。父さんとの
つくえ おく とう
やくそく くるま かぎ
約束どおり、車の鍵にしかつきたくなかったからだ。

せんしゅう もくようび じどうしゃ う つか
そして先週の木曜日、自動車のテストに受かってやっとキーホルダーを使えるよ
うになった！

くるま うんてん びょういん
車を運転できるようになったらやりたかったことがある。それは病院でボラン
ティアをすることだ。父さんが病気の時、町の大きな病院にいたんだけど、そ
びょうき とき まち おお びょういん
このお医者さんたちはみんな親切だった。だから、今日から学校が終わったら車で
いしゃ しんせつ きょう がっこう お くるま
病院まで行って、ボランティアを始めるんだ。
びょういん い はじ

ぼく に げつ す おとこ こ であ こ
僕がボランティアになって2か月が過ぎたころ、ある男の子と出会った。その子
さい こ
は7歳。とってもおもしろい子だ。

こ びょうき かぞく びょうき こ
「この子、病気のかなあ。それとも家族が病気のかなあ」いつもその子は
ぼく てつだ びょういん なか み き ぼく こ こと
僕の手伝っている病院の中のコンサートを見に来ている。でも僕はその子の事をあ
し
まり知らなかった。

ある日、その子は僕のキーホルダーを見て、「わー、かっこいいね」と言った。

僕は、「うん、父さんにもらったんだ」と答えた。

するとその子は、「へー、僕のお父さん、虹が好きなんだよ」

僕も答えた。「へー、そうなんだ。僕のお父さんも虹が好きだったんだよ」

何気なくそんな話をした。その一週間後、その子が僕に話しかけてきた。

「おにいちゃん、あのキーホルダー、くれない？」

「え？でも、これは父さんにもらった大切なものなんだ」

するとその子は悲しい顔をして言った。

「お父さんにあげたいんだ。。。病気で死んじゃうかもしれないから。。。」

僕はびっくりした。

「！！！」この子のお父さん、そんな重い病気なのか。

僕は迷った。このキーホルダーは僕にとってはとても大事なものだ。父さんの形見だから。でも、まだ小さいあの子が死んでいくお父さんのことを思って、このキーホルダーを欲しがっている。あの子はどんなにつらいだろう。僕も父さんが病気の時、とてもつらかった。

2, 3日して病院に行った僕は、あの男の子を探した。その子は中庭で一人であそんでいた。

ぼく はな げん き
僕は話しかけた。「おーい、元気か」

「あ、おにいちゃん」

げん き
「よう。元気か」

「うん！」

「なあ、このキーホルダー、やるよ」

「えっ！！ ほんと？ほんとに、いいの！？」

とう よろこ
「うん、お父さん、喜ぶといいな」

おおよろこ にい
「うん、きっと大喜びするよ。ありがとう、お兄ちゃん！」

げつ す なつ あつ ひ ひ ひとり おとこ
それから3か月が過ぎた。また夏の暑い日がやってきた。ある日、一人の男の

ひと ぼく
人が僕のうちにやってきた。

まち びょういん こうこうせい
「すみません。あなたは町の病院でボランティアをなさっている高校生ですね」

「はい、そうですが」

かえ
「そうですか。あなたにお返ししなければならないものがあります」

おとこ ひと にじ だ
そういうと、その男の人はあの虹のキーホルダーを出した。

ぼく びょういん かんじゃ むすこ
「あれ？これは僕があつた病院の患者さんの息子さんにあげたんですけど」

わたし むすこ
「ああ、あれは私の息子です」

「え、。。。お父さんが病気だって。。。」

「いえ、病気だったのは、息子の方です」

「そんな。。。」

「もう治らない病気だって知っていたんでしょね。私が虹が好きだから、
『父さん、こんな変わったキーホルダーを見つけたよ！』って言って、私にくれた
んです。キーホルダーを私に渡す時、あの子はすごく嬉しそうでした。ありがとう
ございます。もう息子はいなくなったので、これはあなたにお返ししようと思って」

「そんな。あの子が病気だったなんて」

キーホルダーを僕の手の上にのせると、そのお父さんは帰って行った。

手の中に残ったキーホルダーに僕は言った。

「父さん。父さんの方が幸せだったね。あの子のお父さんの後ろ姿はとっても
悲しそうだったよ。父さんを亡くした僕より、子どもを亡くしたあの子のお父さん
の方がずっとつらいんだろうな。あの子はあるに小さかったのに、もう天国に行
っちゃったんだね。やさしい子だったんだ。強い子だったんだね。自分が病気なの
に、お父さんに喜んでほしかったんだ」

元気で毎日を送れる自分に感謝して頑張らないと。あの男の子の分まで。

僕は虹のキーホルダーをぎゅっと握りしめた。